

## 労働社会における遊戯\*

### —— 労働と遊戯の関係の変遷 ——

グンター・ゲバウア (小松恵一訳)

#### Das Spiel in der Arbeitsgesellschaft

#### —— Über den Wandel des Verhältnisses von Arbeit und Spiel ——

Gunter Gebauer (aus dem Deutschen von Keiichi Komatsu)

遊戯を一般的に考察し、さらに、実際に行われている個々の遊戯を考察することが、何らかしかな労働にかんする反省に寄与できるであろうか。こうした問題設定で、わたしが最初に思い浮かべるのは、遊戯は労働の反対概念であるけれども、それは偶然にそうであるわけではないということである。両概念、つまり、遊戯と労働は、相互に関係している。両者は、相互に排除しあう対立を形成しているようにみえる。その両概念にかんする近年の歴史を手がかりに、遊戯と労働がどのように相互に規定しあい、反対に、労働とみなされるものが、いかに遊戯にかんする考え方によって本質的に規定されているか、それを追求することは、興味深いことであろう。こうした考え方を追っていくと、いかに労働と遊戯のあいだに張り渡された視野の中で、両概念のその都度の関係が変化を遂げてきたかがよく分かることであろう。この二つの概念を、一対の対立概念として配置するやり方は、今世紀の始めから、人間学の文献に見ることができる

(Groos, Huizinga, Plessner)。そうした見方は、現代に至るまで続いている。——しかし、この論文では、以上のような当初の期待は、ある観点からは適切でないということが明らかとなるだろう。しかもそうした観点は、この問題設定に非常に有益なのである。

労働概念にかんする文献では、ほとんど遊戯については述べられていない。この事情は予期できるものであった。反対に、遊戯にかんする文献では、労働世界への引証が広く行われている。つまり、遊戯というのものは、「労働の観点」から考察されているのである。しばしばそれは、まったく労働から解明されている。つまり、遊戯は、社会関係や社会的行動の仕方を教え込むとか、遊戯は、労働世界の諸関係の圧力のもとで墮落し、阻害される、遊戯は最後には労働にだんだんと近づいて行くとわれたりする<sup>1)</sup>。そのように言ってしまうと、遊戯と労働の関係がどのようなものなのかについて知ることはない。同様に遊戯にかんする文献においても、労

#### \*訳者注記

この論文は、ベルリン自由大学のグンター・ゲバウア教授が、1996年10月22日に仙台大学で行った講演の原稿を翻訳したものである。かれはここで、遊戯と労働をめぐる思想史に斬新なアプローチをしている。それによって、錯綜した両者の関係が整理されて見えてくるのではないか。翻訳を掲載する所以である。ゲバウア教授は、「仙台大学紀要」への掲載を快諾された。ゲバウア氏のご厚情に感謝するとともに、また、翻訳に当たって、特に経済学に関わる部分で大和田寛教授から多くの示唆を受けたことを感謝をもってここに記すものである。

働と労働関係がどのように変遷してきたかについては、ほとんど展開されてはいない。だから、また、遊戯をも共に変化させてきた労働の変化についても述べられていないわけである。さらに、そもそも労働概念が詳細に検討されるなら、どのような種類の労働が遊戯に影響を及ぼしてきたのか、つまり、賃労働なのか、営利労働なのか、企業的活動なのか、頭脳労働あるいはどんなものであるにしろ、述べられることはない<sup>2)</sup>。

この講演を準備する際に、もっともわたしの関心を引いたのは、視線の逆転である。つまり、遊戯から労働へ、という方向である。そういう方向は、遊戯にかんする文献ではまったく見出すことはできない。かえって遊戯によって、労働の何であるかという規定が影響を受けているのではないか。遊戯は、労働世界には理想として、あるいは反対物として留保されている特有の性格、つまり自由とか創造性とか、喜びといった共同化の特有の形式を持っているのではないか。そうであるならば、遊戯概念の根本的変更は、労働概念をもまた変えることになるだろう<sup>3)</sup>。だから、わたしは自ら、この問いにたいしてある解答を見つけだそうとしなければならなかった。遊戯の領域全体は当然、わたしのこの試みには大きすぎる。必要であったのは、こうした試みが可能であるあらゆる局面で、経験的な、社会学的な、歴史的な考察立ち戻ることだった。そうすることによって、わたしのむしろ哲学的な考究を、実際に現れてくる具体例に関係づけることができるのである。わたしは、こうした個別研究に、遊戯のある限定された領域、つまりスポーツという領域から取り組もうとする。スポーツは労働にことに緊密な関係を持っているだけに、こうした試みは、すでに正当化されているように思われる。この領域では、スポーツと労働の関係は多く議論されており、特に50年代から70年代にそうであった。しかし、こうした議論に参加したほとんどの著者たちは、ある根本的な誤りを犯しており、それが多

くの研究の価値を奪っているのである。

わたしはこの間違いを証示することになるが、このテーマにことさらに重要である著者(すなわちプレスナー)の場合には、その誤りが体系的な歪曲になることを示すだろう。この誤りを避けるために、わたしは、ある単純ではあるが、有用な区別を導入し、以後適用したい。それがわたしの最初の、批判的仕事である。その次にわたしは、本来の探求の出発点としてノルベルト・エリアスとエリック・ダニングの研究を取り上げる。この研究は、この区別を暗黙のうちに関係がいかにかに把握されうるかという問題に説得的な提案をしている。

さてプレスナーについて<sup>4)</sup>。彼は、その考究の出発点を次のように規定している。「人間の自己疎外にかんするマルクスの学説は、今日まで理想主義の原理を保持し、それは影響力を持つ。その原理とは、つまり、人間は、かつて自分自身に一致していた以上、そのようなものでなければならず、この内と外の合致という根本形態に基づいて、人間は精神的倫理的自由の前提を獲得する」(Plessner, S. 31.)。プレスナーによれば、近代の労働社会は、人間の自己疎外を廃棄できない。ところが、遊戯はこれをなすはずである、という。プレスナーは、劣悪な労働世界にたいして、遊戯を暗々裏のうちに理念化しているのである。かれは、この「理念化された」概念に基づいて、「現実の」遊戯を測定するのだが、その際、理念化されたものと実際の場合の距離を配慮することはまったくない。「真の」遊戯(それは明らかに無時間的な本質であるが)によって測量した結果、かれは、実際に見られる「現実の」遊戯(ここではスポーツ)を、「墮落して」劣ったものとする。スポーツは、遊戯を裏切っているというわけである。労働関係の状態については何も言われることがない。

批判的にプレスナーの思考過程に注釈しよう。われわれが現実の遊戯に見出すものは、現実の労働関係との密接な関係の中で展開してい

る。遊戯は、劣悪な現在を癒すという時間を超える本質あるいは力を持ってはいない。遊戯が人間を形成するために意義ある貢献をなし得るとされてきたことは事実であるが、それは、「現実の」遊戯とは完全に区別される遊戯の理念化なのである。同様に、「理念化された」労働と「現実の」労働もまた乖離している。遊戯と労働の理念化を、ユートピア的空想的試みとして用いるなら、話しは別である。しかし、そうしたユートピアについて、プレスナーが語っているわけではない。

われわれは、「理念的な」試みと「現実的な」実際の状況との区別に注目すべきである。その際、逆転した方向、つまり遊戯から労働へという方向も見据えておかなければならない。この視野において、「現実の」労働との関係で「現実の」遊戯から何が見えてくるのかという問いがたてられることになる。

別の二人の著者(エリアスとダニング)は、スポーツと労働との関係にたいして異なる視角をもっている。かれらは、その著書〈Quest for Excitement〉で、「現実の」遊戯と労働世界の「現実」を関係づけている<sup>9)</sup>。すなわち、人類学的に遊戯といわれるものは、社会学的に見れば、余暇の領域に属する。余暇において人は、自発的で、濃密な情熱的行動をし、情動の快適な状態を見出す。それらは、意識的に求められ、特にスポーツ、演劇、さらには、ウェスタン、通俗映画、また、競馬、賭事、ダンスなどの特別の活動において求められる(S. 66)。こういった遊戯活動を、両者は、「模倣的」(mimetisch)と呼ぶ。それはまねをするという狭い意味ではなく、労働世界との関係においてこうした活動を特徴づける用語である。そうした活動は、労働の補足であるだけでなく、それ自身、労働世界に劣らず現実的な固有の世界、感情、情動、濃密な生の世界を作り出す。そうした特性から認識できるのは、そうした活動が、労働に携わり、遊戯活動を制御して営んでいる諸個人のある特定の一面を示すということである。

労働は、高度に分化し都市化した社会では、厳密に時間がコントロールされ、分業化し専門化した過程で感情をコントロールしながら遂行されている。ここで機能しているのは、文明化の過程で形成された欲望の社会的在り方である。労働と遊戯(あるいは余暇)は、同時に観察されなければならない。一方は、他方なくして理解されない。両領域は、感情制御の原理によって、組織化されている。つまり、労働は肉体的表現を極度に減少させることを要求するのにたいして、ミメシス的な遊戯は、まさに反対に、身体的な興奮と強い感情への希求とみなすことができる(エリアスとダニングの例は、映画とサッカーである)。もちろんこの希求は、「社会的生の相対的秩序付け」を持続的には妨げない状況の下でしか生じ得ない。いずれにしても、日常的なことではない(S. 71)。労働と遊戯の関係を、エリアスとダニングは、明らかに音量やスピード、温度を調節する調節装置のイメージで考えている。労働の場合には、下げる方向で、遊戯の場合には上げる方向で調節されているということになる。こうした遊戯のミメシス的な特徴を強調するならば、遊戯は、現代社会にとっての情動や感情の意味を示していると言える。遊戯は、現代社会を演劇の上演のように提示するとも言える。つまり、強く制御されてはいるが、喜んで求められ、正規に希求され、それどころか要求までされており、しかし少なくとも同じように心配の種でもあるものとして。スポーツがも提供するものは、だから、「リアリズムの」上演以外のものではない。スポーツは、つまり、営利労働の中心的な特徴を示しているのである。スポーツでは、それが、本質的に身体的に示され提示される。

身体は、近代労働社会の大きなテーマである。市民社会の始めから身体は、その機能、その情動や情熱、性癖の制御を含めて、一つの問題として考えられてきた。たとえば、18世紀の後半以降(特にイギリスで)、労働は新たに組織化さ

れ再編されることによって、新たな段階の規律に達した。イギリスにおける自己形成的な工業社会にあっては、「経済的な」労働概念が成立した。それは、労働と遊戯という対立とはまったく別の対比の中に組み込まれた。

この対比は2種類あるが、それらはわれわれの考察にとって重要である。第一に、労働は、アダム・スミスとリカードの経済学の中で、疑似物理的な術語として展開された。労働力や時間、商品、市場、価値、価格といった他の諸概念ともども、抽象的概念として理論の中に組み込まれたのである。経済学者たちの営為は、こうした術語を、ある理論の中で体系的に関係づけることに向けられた。そこにおいて労働は、交換とともに、価値創造的要因の中心的役割を担った。つまり、「生産的労働」である。初期産業社会で決定的に新しいのは、生産物が価値上昇を被るのは、それにくわえられた労働力によってである、という認識だった。労働によって社会は、富を増加させる。生産的労働によって利益を上げ、富を増大させようとするのは、それが資本主義の内的な動力になるわけだが、初期の経済理論家たちによって正当化され、適当なものと認められた。このようにして、過去において取られていた態度、社会の下層階級に帰せられていた態度、つまり、足るを知ること、かつて達成された段階に限定するといった態度が、価値を奪われることになった。いかなる価値上昇をも富をも産出しない自給経済の不生産的な労働、つまり、「非経済的」態度が、労働との第一の対立物である。

第二の対比は、労働によって生産物に価値を付け加える人々、つまり賃労働者とのあいだに張り渡される。賃労働者の社会的立場は、その労働の種類によって完全に規定される。理論上かれらは、自由な個人、すなわち身体的所有者とみなされる。その本質的な性質、つまり労働力は、労働者が労働市場において売る「自然的所有」(ロック)である。労働は、生存の唯一の可能性となるだけでなく、交換とともに、労働力

の所有者としての諸個人が社会化する唯一の形式と捉えられることになる。労働によってもたらされる労働者間の社会関係は、(かつて理論上主張された)社会契約とは異なり、たとえば、あらゆる賃労働者にとって重要である労働条件という形式で、現実に経験可能である。その際、労働者間の共通性が形成されるのは、労働者の協力とか交渉であるというよりもはるかに、身体が時間的空間的にきつく制御された機能を求められるとということによってなのである。ここで現れてくるのは、労働者たちの「怠惰」、安逸、欲望、「情熱」にたいする資本家たちの不安である。つまり一言で言えば、「非規律的な身体」にたいする不安である。これが第二の、生産的労働に対する対立となる。この対立はまた、有用な身体と無用な身体との対立という言い方もできる。

労働社会は、その始めから商品生産と軌を一にして労働規律を生み出した。すなわち、それは、理論的な枠組みと教育的戦術によって武装され、有用な身体の出産に仕える装置だった。この過程は、労働者を強制的な斡旋で徴発したマニファクチャーの原産業化の時期に始まり、工場という「教育的」で規律化する機能を有する場で継続された<sup>6)</sup>。労働は、産業化初期段階のイギリスの理論家たちにとっては、必然性の領域に属していた。これら哲学者、経済学者によって、労働は、身体的労働として考えられ、苦役として労働を捉える概念的伝統につながられた。同時に、マニファクチャーと工場で遂行された「現実の」労働は、抽象的な量を用いて理論的に構成された。これが、理論的学問領域としての国民経済学の端緒である。賃労働者によってなされる労働も、それを経済学上で再構成した概念も、遊戯ともまったく関係を持っていない。

遊戯、つまり自由、創造性、美意識の側に立つ概念である遊戯と労働とを対照して考察する概念領野が切り開かれたのは、18世紀の終わ

り、カントとシラーの観念論的ドイツ哲学においてであった。カントはまだ、伝統的な前工業社会的労働概念を用いており、それにたいして、シラーは、その時代の労働社会に驚くべきほどアクチュアルな反応を示している。

「労働」は、カントによって、『人間学』と『教育学』の中で言及されており、特別の規定を施されておらず、一般的な活動として把握される。その場合特に、学生や教師、学者の労働に定位し、それが世間の常識であるかのように、遊戯と関係づけられている。つまり、労働と遊戯とは、活動的であることの二つの根本様態なのであって、人間の根本的メルクマールである、というわけである。「人は、遊戯として仕事をすれば、暇仕事だといわれる。しかし、強制されてしごとをすれば、それはつまり労働なのである。学業上の陶冶は子供にとっては労働であるはずであるが、自由な陶冶は遊戯ということになる」<sup>7)</sup> (『教育学』)。

カントは、労働と遊戯を明瞭に分離する。子供は遊戯において学ぶことはない。「これは、まったく逆転した効果をもたらす。子供は遊戯すべきであり、気晴らしの時間を持つべきであるが、同時にまた労働することを学ばねばならない。子供の練達の教化は、精神の文化と同じようにもちろんよきものであるが、この二つの文化の在り方は、異なった時期になされなければならない」。カントは明白に、遊戯を教育学的に正当化することを断念している。労働と遊戯は両者ともよいが、しかしそれぞれの時間というわけである。(Kant, S. 470)

労働はカントにとって、一方では、理性的であるための原理であった。しかし他方では、複雑な事情を持つ。つまり、自由の原理でもあったのである。自由に到達するためには、「自然的な怠惰」が前もって克服されていなければならない。これは二つの仕方で可能である。その一つは、カントの自由にかんする考え方を教育学の領域に移し替えることによってなされる。つまり、学生が学ぶのは、「法則的な強制に随うこ

とと、自己の自由を用いる能力とを統一する」ということである (S. 453)。二つ目は、遊戯において生じる。しかしそれは、一般的な〈homo ludens〉としてではなく、ホイジンガがまったく考えてもいなかったような、特殊な遊戯においてなのである。つまり、名誉と暴力、金銭を獲得する仕方においてなのだ。「自然(本性)から怠惰」である人間は、それらを現実の目的とみなすが、「そうした人間が実際に関与する関心は、たんに狂気の関心である」<sup>8)</sup>。遊戯者が非理性的であるとしても、遊戯はしかしながら、「より賢明な自然」によって理性的になる。そうした自然が、「本来、生きる力をそもそも誘惑への屈服から保護し、活発に保たれるように」遊戯者の力を鼓舞する<sup>9)</sup>。

さしあたり奇異に思われるカントの考え方には、いくつもの注目すべき点があり、未来を指し示す点もある。労働が自由と結びつき得るように、遊戯は、理性という特徴を持ちうるのである。労働と遊戯の中心的な特徴は、ある特有の条件の下にはあるが、交換可能である。他方、カントは、「現実の」遊戯と「現実の」労働とを関係させる。自然の遊戯という概念によって、しかしカントは、遊戯の理念化を導入する。理念化され、より高い段階とされる遊戯は、自然のたばかりによって生じる。さらにカントは、名誉とか暴力、金銭が関心の中心をしめる特殊なタイプの賭事において、「現実の」遊戯と「理念化された」遊戯を結びつける。自然は、現実の遊戯を再編し、盲目的ではあるけれども、同時に理性的な目的に仕えるようなものとする。このような狂気の傾向性において、想像力が「自己創造者」(同所)となる。この自己誕生の比喩は、名誉や暴力、金銭を求める盲目的な賭事に捕らわれている人間が自己自身を創造する、という意味で理解されなければならない。カントにおいては、自然がなすところを、以下に引用される作家においては、人間が自己自身の力で創造するのである。

シラーは、1793年の美的教育のための書簡で、未来を規定することになるある調べを上げ始める。彼のテノールは、時代批判であり、現実の労働世界の諸関係からの離反であり、人間に加えられた痛みと喪失の意識であり、人間的な自然の回復という思想である。文明への離反運動は、その点ではルソーに随っているが、教育の改革において生起する。しかし、それはルソーの『エミール』(1762)とは違った形で構想されており、孤独のうちにおけるある種の原始的な労働による反文明的なものとしてではなく、むしろ社会のまっただ中で遊戯による和解として生じる。シラーが美的書簡の中で構想する思惟モデルは、「現実の」労働と「理念化された」遊戯とを対置するものである。和解は、本来合致しているけれども、市民社会において離反することになった二種類の間能力を媒介することによって可能となる。和解は、本質的に、芸術の遊戯によってもたらされる。労働世界の環境のもとで分離してしまった二つの能力をシラーは、感覚的欲求と形式欲求と呼ぶ。

感覚的欲求は、人間を時間的質料的存在とする。専門化や分業、時間統制さらに身体の規律化という新たな労働条件のもとでは、もともと人間が引き受けていた理性的道徳的形成という行い（それは形式欲求によって生じる）は、もはや成就されない。個人の感覚的身体的生は、外部から他者によって決定されており、個々の能力も、「自然が与えたと思われる限界よりもはるかに超えて」高められているという意味で<sup>10)</sup>、一面的なものとなる。これは、分業とそこから帰結するより高い生産性の記述として読むことができる<sup>11)</sup>。この生産性は、「全体性」を崩壊させ、感覚的な能力を不具にするという代償を払う。

「享受は労働から、手段は目的から、努力は報酬から切り離される。永遠に全体の個別的で小さい断片に拘束され、人間はそれ自身が断片としてしか形成されない。人間が回している車輪は、永遠に一つの雑音を立てるだけであり、耳では人間存在のハーモニーを展開することもな

い。自分の自然のうちに人間性を刻印することなく、人間は、その仕事の痕跡、その科学の痕跡となる」<sup>12)</sup>。

自己自身に自発的に形式を与えるのは、もはや人間ではなく、人間は「人工的で光を厭う時計仕掛け」であり、「公式の仮借なき厳密さ」<sup>13)</sup>にしたがって形成される。人間は、生き生きとした悟性や天才、感受性の代わりに、「死せる文字」や「訓練された記憶」によって「導かれる」<sup>14)</sup>。

こうした文明化された機械装置への反モデルとして、シラーは美的教育を構想する。それが第三の欲求、感覚的欲求と形式欲求とは異なる第三の欲求つまり遊戯欲求を形成するのである。遊戯は、遊戯欲求が実現される活動として、失われた能力の回復、文明によって被った喪失の補償、人間の自然の回復、要するに人間の自己自身との和解をもたらすものとされる。人がしなければならないのは、遊戯欲求にそれが発揮される機会を与えることだけであり、遊戯欲求は、「形式に質料を、現実性に形式をあたえる」<sup>15)</sup>ものとなる。

ヘーゲルは、その美学講義の中で、シラーの思想に同意し、慎重にそれを彼の概念体系の中に統合する。それは、次のように総括される。つまり、美的教育が目指すところは、「傾向性や感性、心情がそれ自身において理性的となり、それによって理性や自由、精神性をその抽象形態から解き放ち、それ自身理性的な自然という側面と合致させ、その肉と知を保持するように、傾向性や感性、心情を形成することである」<sup>16)</sup>。劣悪な現実において、その真の自然を生きることを妨げられている人間は、遊戯欲求によって（つまり、美の「生き生きとした形態」において）自己実現の第二のチャンスを得る。労働社会の諸条件のもとで、遊戯は人間存在を決定する一部となる。

遊戯概念をシラーは、第五書簡の有名な定式化によって説明する。「人間は、言葉の十全な意味で人間である場合にのみ遊戯する。人間はた

だ、遊戯する場合にのみまったく人間である」<sup>17)</sup>。シラーは再び労働世界に背を向け、それを劣悪な状態のままに放置する。労働世界に対しては、シラーは、遊戯という特別の王国、特に美学の王国を対置する。初めて遊戯は、そのユートピア的性格を付与される。遊戯は、感性や理性、道徳の和解のユートピアとして構想される。

ヘーゲルは、シラーの遊戯概念に興味深い糸口を認めたのだが、あらかじめシラーとはまったく異なる決定を下す。ヘーゲルにとって重要なのは、社会的な全体から分離された「遊戯」という特殊王国を形作ることではなかった。18世紀の政治経済学を翻ってつかみ直し、その思考方法と対決するところから出発した結果、ヘーゲルにとっては、支配的なカテゴリーは、労働であった。ヘーゲルは労働を、経済的過程への限定から取り出し、それを活動や行為をすべて包括する概念として導入したのである。『精神現象学』では、行為する主観は、もちろん労働する人間ではなく、精神としての人間である。

精神の労働は、一連の諸段階を構成し、精神がそれぞれの段階で作り出す「業」によって特徴づけられる。その労働は、「非常に多様な現象を通過し、芸術作品のうちに現存するような外的事物において、自己自身を産出するという在り方まで行き着く。そして人間は、そのように外的事物のみならず、自己自身とも同じようにふるまう」<sup>18)</sup>。諸段階が継起する原則は、二重である。一方で、精神は、「それだけで存在するものを作りだし」、他方精神は、「精神のうちにあるものを、自己自身と他者にたいして」対象化する。「この精神の二重化において、精神は、存在するものを直観と認識にもたらず」<sup>19)</sup>。精神がより高い段階へと運動して行くというヘーゲルの構想（感覚的確信から、自己意識、理性、精神、最後には宗教、芸術、絶対知に至る）のなかに、シラーによって要請された遊戯欲求の働き、つまり、分業的現実の克服、芸術における感性と精神の媒介（精神化された感性と感性化

した精神）、これらすべての理念化された過程がすくい上げられ、つまり、それらの過程は、ヘーゲルの思惟に併合され、労働というすべてを統合する概念のもとにおかれる。労働によって人間は、精神として自己自身を創造する。ヘーゲルが構想する「理念化された」労働によって、遊戯と労働の対立もまた廃棄される。「真の思想と学問的な洞察は、ただ概念の労働のうちに獲得される。概念のみが知の普遍性を生み出す」<sup>20)</sup>。「理念化された」労働は概念の労働となる。

ヘーゲル哲学の原理はもともと経済学の理論に由来する。それは、過程の中で進展し、ダイナミックに生産の増大を目的とする生産性の原理である。人間が生み出すすべての産出物は、労働による産物である。この創造的で、作品を生み出す過程の最高の産物は、人間自身である。人間は、必然的かつ歴史的な過程の中で、精神の対象化という労働を通して、自己自身を創造する。「自己の知の形式を自己から取りだしてくるという運動は、人間が現実の「歴史」として成就させる労働である」<sup>21)</sup>。精神の労働と人間の歴史（必然性と偶然）とは、合一する。

ヘーゲルが精神としての人間について一般的に述べた事柄は、また個々の人間にも妥当する。労働を通して個人は、自己意識を獲得する。支配とは異なり、労働する下僕は、対象を作りだし、これを消費せずに、それらに持続というエレメントを与えることによって（下僕は自己の「欲望」を抑える）、この対象において自己自身を「自己自身が自立的な存在であるという直観」にもたらず可能性を持つ。労働によって、労働する下僕は、自己自身を通して自己自身を再発見する。下僕は、自己に固有の意味を与えるが、「それはまさに、単に他者の意味しかないと思われた労働においてなのである」<sup>22)</sup>。

労働する下僕は、その労働によって自己規定に到達する。実際ヘーゲルは、法哲学において、労働のうちに「より高い解放」<sup>23)</sup>があると考えている。いかなる解放を彼は考えていたのか。「この解放は、主観における厳しい労働である。振る

舞いの単なる主観性、欲望の直接性、感覚や恣意的な決意の空しさとは対立する労働である」。確かにヘーゲルは、労働分業によって生み出される「抽象」を見ていたし、生産の抽象化が絶えず機械的運動となって行くということも忘れない。しかし、彼の観念論的な歴史観では、歴史の上昇運動つまり進歩をともなうこの過程の果てに、「生産の抽象化」という歴史がまさに、労働を通して「最後に人間が労働から抜け出て、そのかわりに機械が取って代わり得るようにする」ことを可能にする<sup>24)</sup>。

ヘーゲルの哲学的思索は、概念的対立を止揚する。遊戯というカテゴリーを廃棄することで、シラーが遊戯に帰属させたすべての特性は、「理念化された」労働に移行することになる。この意味で遊戯の概念の変化は、労働の概念をともに変更していると言える。しかし、「現実の」遊戯はどのように評価されるのだろうか。シラーにおいては、微妙な結論が導き出される。つまり、シラーの強調された遊戯概念は、社会的な現実の中ではただ高級な芸術にのみその端緒を見出す。芸術は、劣悪な現実にたいして、ユートピアとして対置される。シラーの理念的な芸術把握は、ドイツ教養市民層には、感覚的な経験と、形成という人間の能力を破壊する労働社会の影響の解毒剤という意味を持った。「現実の」遊戯は、それ自身としては和解の能力は持たない。しかし、約束と希望の力は持つ。遊戯は、現実にたいしてよりよき世界の残照とみなしうる。この観点では、「現実の」遊戯は、社会的現実における社会的労働のある種の相対的理念化である。美的教育は、とりわけ「現実の」遊戯には肯定的な評価をする。ヘーゲルの精神哲学は、それにたいして、とどまり持続的なもの、作品(業、精神の作り出したもの)を求める。遊戯は、精神に対象化の媒体を提供するには、あまりに移ろいがちなものである。偉大な芸術作品のみが、より高い段階への運動の道程で一つの段階を提示する。

わたしが考察したい最後の理論家は、マルクスである。彼もまた、ヘーゲルと同様に、遊戯の諸特性を労働の中に統合したのだろうか。確かにマルクスは、労働を包括的な概念として措定したという点で、ヘーゲルに随っている。ヘーゲルと同様、マルクスは人間を、「自己自身をそれであるものに形成しなければならない存在」<sup>25)</sup> であると把握する。これは、再び労働において生じるのである。人間は労働することによって、その人間性を展開する。まさに下僕の分析におけるヘーゲルと同じく、マルクスもまた、労働における人間の対象化の重要性という構想を持つ。労働の産物を直観することのうちに、人間はその固有の在り方を認識するに至る<sup>26)</sup>。労働はヘーゲルにとってもマルクスにとっても、「人間による自然の領有と人間化」<sup>27)</sup> である。両者は、労働を、社会や時代から独立した、普遍的な人間学的メルクマールとする。しかし、自由と必然性が労働において統一されるヘーゲルとはまったく異なり、マルクスは、労働の物質的側面、自然制約的な側面、つまり必然性の側面を強調する。

『資本論』第1巻においてマルクスは次のように述べている。「労働はさしあたって、人間と自然とのあいだの過程である。つまり、人間が、自己の行為を通して自然との物質代謝を媒介し、調節し制御する過程である。人間は、自然素材そのものには、自然力として登場する。——人間は、この運動を通して外的な自然に働きかけ、それを変更する。それとともに同時に人間もまたその固有の自然(性質)を変化させる」<sup>28)</sup>。「労働」は、マルクスにとっては第一に、普遍的な人間学的な規定であり、「人間の、あらゆる社会形態から独立な存在条件」であり、つまり、「永遠の自然必然性」<sup>29)</sup> として把握される傾向があった。第二に、マルクスは労働を、資本主義的生産過程の内部で、つまり、富と特殊な社会組織も生産する手段としての賃労働として分析する。マルクスの言述のほとんどの部分は、歴史的な過程の考察が占めている。つまり、それ



は、「流動状態にある人間労働において、人間労働から価値が形成され」<sup>30)</sup>、資本が生産され、蓄積される過程の考察であった。

わたしの意図にとって重要なのは、マルクスが、社会において見出した「現実の」労働と、人間の構成条件である「理念化された」労働の構想とのあいだに、たえず緊張を作用させていたことである。「理念化された」労働は、いかなる「現実の」労働にあっても必然的前提をなし、それ故、労働のもっとも疎外された形態においてさえ、少なくとも痕跡として見出しうるものであった。他方、「理念化された」人間学的な労働は、経験的な労働関係にたいしては、ユートピア的約束、労働の解放への希望を形成する。

マルクスの初期の著作（パリ草稿やドイツ・イデオロギー）では、こうした強調された労働概念は、就中ヘーゲルの法哲学との対決を通して展開され（それについてはすぐに触れる）、『資本論』においてもそれに対する明瞭な言及が見出される。たとえば、動物の行動との違いで、人間の労働を特徴づける有名な箇所。次の引用は、労働を人間的な自然（本性）の決定的な刻印として要請することで始まる。「われわれは、労働がひたすら人間にのみ帰属するような形態の労働を想定する」。マルクスはさらに続けて、「ミツバチは、その蜜房を作り、人間の多くの建築家に恥ずかしい思いをさせる」。しかし、人間の労働においては、すでに始めに表象があり、完成した生産物の「理念的」構想があり、その生産物は、労働者が自己自身の行為によって自然的なものの中で実現する。人間は知を持つという根源的な設計は、「人間の行為の在り方を法則として」規定し、行為を人間の意志に従属させる<sup>31)</sup>。

労働はここで、自然に法則を課す、自由で自己規定的で創造的な行為として記述される。つまり「生き生きとした労働」であり、マルクスがその諸側面をさらに記述するところによれば、「ものをつかみ、それを死せるものから蘇らせ、可能的な使用価値から現実的で作用を持つ

使用価値へと変転させるような」<sup>32)</sup>労働である。遊戯が「生」と人間の形成力とを統一できるというシラーの指導的表象、つまり、完全な自由と創造性において生み出される融合という表象は、マルクスの場合も人間存在にとって構成的要素となる。しかし、ヘーゲルと同様に、マルクスもまた、そうした融合を労働という概念のもとで思考し、さらに労働を、マルクスの思惟にとって中心的な生産性という別の概念と結びつける。

生産という考え方は、マルクスの人間学では、シラーが遊戯に帰属させた特徴と溶け合う。その際、自己の目的設定に対する無制限の自由という印象が生じてくる。

「社会主義的人間にとっては、いわゆる世界史のすべては、人間的労働による人間の産出に他ならず、自然が人間のために生成することに他ならない。そうである以上、自己自身によって自己が誕生することについて、つまり、その生成過程についてあらがいのない直感的な証明を持つことになる」<sup>33)</sup>

労働による人間の産出は、明らかに誕生という範型に随って構想されている。しかし、誕生とは異なり、労働は自由なる活動であり、それ自身から生じ、自然の所作ではなく、自らの意志に従属した行為である。労働による自己の誕生と、女性による人間の現実的自然的誕生との類比は、後者にとって不利益に決着する（カントやヘーゲルと同様に）。精神的なるものという原理、それが英雄的なものや遊戯的なものと結びつくと、それは男性的なものの領地ということになるが、そうした発想は、自己誕生を、子供を分娩するという労働からはるかに高めてしまう。メアリー・オブライエンは、誕生過程の価値を奪うこうした考え方のうちに、女性の労働一般を過小評価する原理が働いていると考える<sup>34)</sup>。このような考え方は、家事労働にも延長できるし、それをまさに精神の労働の反対物として提示することにもつながる。それは、非英雄的で、私的な領域で起こる、原理的にあまり自

由ではない労働であり、自己の意志によって法則を与えるという行為にはふさわしくないとされるわけである。

解放された労働のマルクスのユートピアに戻ろう。かれの初期の著作に次のようにある。「われわれが人間を生み出したと仮定するならば、どの人間も、その産出において自己自身と他者を二重に肯定していることになるだろう」<sup>35)</sup>。われわれが、「人間の自己自身による誕生」を仮定するなら、労働には遊戯のあらゆる肯定的な特性が帰せられることになる。次の引用は、この上もなく明瞭に、労働がまったく遊戯の意味で再解釈されている様を示している。

「第一に、わたしは、わたしの産出においてわたしの個性性、その特有性を対象化し、それ故、活動しているときも、ある個人的な生の表現を享受し、また、対象の直観においても、わたしの人格を、対照的で感性的に直観可能なものとして、あらゆる懐疑に卓絶する力として知るといふ喜びを享受するであろう。

第二に、わたしの生産物をあなたが享受し使用するとき、わたしの労働によって人間的要求が満たされたという意識と、人間存在を対象化し、それ故、他の人間存在の要求に応ずる対象をつく出したという意識とを享受するであろう。

第3に、——あなたの思惟とあなたの愛において、わたしを確証されたものとして知るといふこと。

第4に、——わたしの類的本質を確証し実現したわたしの真の存在——」<sup>35)</sup>。

遊戯は、マルクスの理論の中ではいかなる位置をも占めてはいない、しかし、遊戯的なものは、解放された労働のユートピアの中に明らかに取り上げられている。それは、「現実の」遊戯とは、どのような関係を持つのだろうか。マルクス以降のマルキシズム理論は、その土台・上部構造の分岐という図式から、現実の遊戯を反映現象と捉えた。それによって、「現実の」遊戯は、価値を剥奪された。つまり、劣悪な労働

世界の反映として、また、社会的労働への準備段階として。

「現実の」遊戯は、労働世界とミメシス的な関係にあるというエアサスの提案は、よほど現実の遊戯に見合うものである。遊戯は、固有の領域を形作り、その領域に特別の法則を持つ。遊戯は必然性の下位に立つのではない。むしろ、遊戯は、労働世界に現れてくる行為様式、組織原理、社会関係、決定過程、決定の形式などを類比的に実行しているのである。スポーツという遊戯においては、それらは労働世界とはまったく異なる文脈で登場する。それらは徹頭徹尾、身体的過程に移し換えられるのであり、それがまさにスポーツの特徴なのである。

だから、スポーツにおける行為が、労働の領域における身体的な対立に対応していると考えてはならない。遊戯領野における協力というものは、まったく反対に、労働世界において共同して組織化された社会過程の、非身体的な形式を指示するものである。労働世界で分業的相互作用的な過程として組織されているもの、つまり、特殊の能力を持った諸個人の統御された相互作用は、たとえばサッカーのような競技では、共同性つまり共同の遊戯が機能する場であるチームの産出として遂行されているのである。遊戯(ゲーム)の終わりでなされる計算では、関係するゴールあるいは点数が重要なわけだが、それは経済企業における精算(貸借対照)という在り方に対応する。スポーツにおける遊戯は、それ故、ハーバーマスがいうような、労働一般のもっとも疎外された形式、つまりベルトコンベア労働を反映するものではない。むしろスポーツの遊戯(ゲーム)は、商業事務所における労働の諸原理を遂行するのであって、それ故、労働者ではなく、むしろホワイトカラー働の原理を遂行するのである。

クリスチアーネ・アイゼンベルクは、最近出版された社会史的研究において(Fussball in Deutschland 1890-1914, 1994)<sup>36)</sup>、ハーバーマス

のいわゆる宙ぶらりん仮説 (Suspensions-hypothese) とか、プレスナーの代償仮説を、粗っぽくいかなる事実的な知識にも支持されない解釈として反駁している。実際、今世紀初頭、サッカーがドイツに登場し広まって行く時期に、サッカーは、とりわけ商業に携わるサラリーマンや、将来のエンジニアである工科大学の学生たち、上級高校生たちによってプレイされていたのである。アイゼンベルクの記述から明らかになるのは、1900年頃のサッカーは、ホワイトカラー文化の諸原理に適合する遊戯形式であったということである。彼女によって再構成された社交形式、象徴的な自己提示、気晴らし、儀式化した社会関係、義務的な尊称の使用、(学生連合の学生たちのように) ひさしのついた帽子をかぶること、(学生連合をまねた)クラブの命名、これらがすべて明らかにしているのは、サッカー競技の全文脈が、現存する労働関係の、実践的身体的となり生きられたユートピアであるということなのである。もちろんそれは、現実におけるユートピアであり、政治的な要求を持たず、変更のポテンシャルも持たないが、むしろ、より美しい労働世界を求める願望であり、実際の観点における労働の他者なのである。遊戯は、「現実の」労働との関係では、「理念化された」在り方を提示する。つまり、遊戯は、規範の自由な充足であり、自ら選び取られ、自己の願望表象に対応する共同形式であり、また、高揚した時間の享受であり、能力や闘争、偶然の関係が量化された形式で表現される結果の承認なのである。

労働世界との関係で、今日遊戯の役割とは何であろうか。慎ましい共同のユートピアが生きられているスポーツクラブは、今日においてもまだ存在している。しかしスポーツクラブは、かなり説得力を失ってしまった。それはとりわけ、スポーツクラブの共同化の形式が、もはやまったくユートピア的な内実を持っていないからである。「現実の」労働が、根本的に変わってしまったし、それとともに遊戯も、ユートピア的構想

も変化を余儀なくされているからである。スポーツには、多くの新たな遊戯形式、以前とは異なる遊戯形式が存在する。たとえば、シティー・マラソンであり、ウィンド・サーフィンであり、マウンテン・バイキング、パラグライディング、ボディ・シェイピング、健康スポーツなどである。

これらの現象で特に目に付くのは、生産性という思想が、労働の領域からスポーツの領域へと取り入れられているという事実である。スポーツマンの身体が身体を通して生産される。つまり、トレーニングにおいて、身体はその筋肉量を増やし、血液循環や負荷能力を高めている。身体は、生産手段であるとともに生産物でもある。人が身体をトレーニングによって改善するというのは、古くからの思想である。しかし今日、その思想は、驚くべきほど徹底して、最大の広がりを持って、技術的な器具の充満によって支えられており、身体を変化させようという目的をあからさまにして、多大な時間を使って、多様な場で実践されている。それだけではない。身体を別の新しい身体と化す、身体を新たに産出する、つまり、一種の「自己自身による誕生」を目的として実践されているのである。

いまや、労働による誕生と実際の誕生のあとで、われわれは遊戯における誕生を認める。マルキシズムは、労働の解放によって新たな人間を作り出そうとした。今、常に昔からの人間学に固執していた資本主義もまた、人間を変革しようとしているかのようである。しかしそれは、ただ遊戯においてのみ可能なのだ。

#### 註

- 1) これは、ホイジンガ「ホモ・ルーデンス—遊戯における文化の起源」の中心的テーゼである。
- 2) ハーバーマスの初期の論文 (Soziologische Notizen zum Verhältnis von Arbeit und Freiheit, in: G. Funke: Konkrete Vernunft,

- Bonn 1958) は一つの例外である。
- 3) こうした考え方はカイヨワの *Die Spiele und die Menschen. Maske und Rausch*, Stuttgart 1960 に示唆を受けている。
  - 4) H. Plessner: *Spiel und Sport*, in: ders., *Diesseits der Utopie. Ausgewählte Beiträge zur Kultursoziologie.* Dusseldorf, Köln 1966.
  - 5) N. Elias/E. Dunning: *Quest for Excitement. Sport and Leisure in the Civilizing Process*, Oxford 1986 (邦訳『スポーツと文明化』, 法政大学出版局)
  - 6) L. Bauer/H. Matis: *Geburt der Neuzeit. Vom Feudalsystem zur Marktgesellschaft.* München 1988, S. 367 参照。
  - 7) I. Kant: *Pädagogik* in: ders., *Knats Werke. Akademie-Textausgabe Bd. IX*, Berlin 1968, S. 470 (『カント全集』第 16 巻, 54-55 頁, 理想社)。
  - 8) I. Kant: *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, in: der., *Kants Werke. Akademie-Textausgabe Bd. VII*, Berlin 1968, S. 274f. (『カント全集』第 14 巻, 250 頁, 理想社)。
  - 9) I. Kant, a.a.O., S. 275. (同上 251 頁)。
  - 10) F. Schiller: *Über die ästhetische Erziehung des Menschen*, in: ders. *Sämtliche Werke. Bd. 12, Zweiter Teil.* Stuttgart, Berlin 1905, *Sechster Brief.* (シラー『人間の美的教育』第 6 書簡)。
  - 11) H.J. Krüger: *Stichwort 'Arbeit'*, *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, hg.von K. Grunder u. J. Ritter, Darmstadt 1971, S. 482-487.
  - 12) F. Schiller, a.a.O., *Sechster Brief* (シラー, 第 6 書簡)。
  - 13) F. Schiller, ebd. (同所)
  - 14) F. Schiller, ebd. (同所)
  - 15) F. Schiller, a.a.O., *Vierzehnter Brief.* (シラー, 同書, 第 14 書簡)。
  - 16) G.W.F. Hegel: *Ästhetik Bd. I.* Berlin, Weimar 1965, S. 70.
  - 17) F. Schiller, a.a.O., *Fünftehnter Brief* (シラー, 同書, 第 15 書簡)
  - 18) G.W.F. Hegel, a.a.O., S. 42.
  - 19) G.W.F. Hegel, ebd.
  - 20) G.W.F. Hegel: *Werke 3, Phänomenologie des Geistes.* Frankfurt/M. 1970, S. 65. (『精神現象学』金子武蔵訳, 岩波版ヘーゲル全集第 4 巻, 68 頁)。
  - 21) G.W.F. Hegel, a.a.O., S. 586. (『精神現象学』, 同上ヘーゲル全集第 5 巻, 1156 頁)。
  - 22) G.W.F. Hegel, a.a.O., S. 154. (『精神現象学』, 同上ヘーゲル全集第 4 巻, 196 頁)。
  - 23) G.W.F. Hegel: *Werke 7. Grundlinien der Philosophie des Rechts.* Frankfurt/M. 1970, S. 187 (ヘーゲル『法の哲学』藤沢敏之訳, 中央公論「世界の名著」第 21 巻, 253 頁)
  - 24) G.W.F. Hegel, a.a.O., S. 198 (同書, 231 頁)
  - 25) I. Fetscher: *Karl Marx und der Marxismus.* München 1967, S. 53.
  - 26) I. Fetscher, a.a.O., S. 54.
  - 27) I. Fetscher, a.a.O., S. 55.
  - 28) K. Marx: *Das Kapital, Bd. I*, in: EW. Bd. 23, Berlin 1972, S. 192. (マルクス『資本論』第 1 巻, 国民文庫, 第 1 合冊, 312 頁)。
  - 29) K. Marx, a.a.O., S. 57. (同書, 85 頁)。
  - 30) K. Marx, a.a.O., S. 65. (同書, 99 頁)。
  - 31) K. Marx, a.a.O., S. 193. (同書, 312-313 頁)。
  - 32) K. Marx, a.a.O., S. 198. (同書, 321 頁)。
  - 33) K. Marx, MEGA, 1. Abt., Bd. 3, S125f. (zitiert nach I. Fetscher, a.a.O., S. 41f.), マルクス『経済学哲学手稿』国民文庫, 「マルクス・エンゲルス全集」第 40 巻, 161-162 頁。
  - 34) M. O'Brien: *The Politics of Reproduction.* London 1981.
  - 35) K. Marx: MEGA, 1. Abt., Bd. 3, S. 546f. (zitiert nach I. Fetscher, a.a.O., S. 41f.) 同書, 467 頁。
  - 35') マルクス, 「ミル詳説」, 同書, 382-83 頁。
  - 36) Ch. Eisenberg: *Fußball in Deutschland 1890-1914, Ein Gesellschaftsspiel für bürgerliche Mittelschichten*, in: *Geschichte und Gesellschaft* 20, 1994, S. 181-210

(平成 8 年 11 月 1 日受付, 平成 8 年 12 月 20 日受理)